

日本の教会の破れ口 「クリスチャン同士の結婚」 その1

— 課題は何か？ —

クリスチャン結婚支援ミニストリー
「リベカ」代表 中西じゅん子

今号より、クリスチャンの結婚支援を行っているミニストリーの代表 中西じゅん子さんに、その活動がどのようにして高い成婚率につながっていったのか、お話しいただきます。



クリスチャンの結婚支援を始めた理由

私は石川県の金沢市在住で、夫が牧師をしており、牧会の中で「なぜ日本の教会は、こんなにも力がないんだろう？」と考えさせられていました。少子高齢化、子どもや若者がいない、献身者や奉仕者の不足、教会の財政難、教会堂の老朽化……。これらのループは、「どこか祝福が漏れているのではないだろうか？」と感じていました。

教会の祝福が漏れている破れ口の一つは「信仰継承」にあり、もう一つは「クリスチャン同士の結婚」にあると思いました。なぜなら、クリスチャンホームの子どもたちがみな信仰を継承し、クリスチャンがみなクリスチャン同士で結婚をしていたら、日本のクリスチャン人口はとくに1パーセントを超えていたのではないかと思ったからです。

そんなことを思いめぐらしていた時、金沢市内の別の教会に通う古くからの友人が「近隣の教会で協力して、独身クリスチャンの結婚支援をしませんか？」と声をかけてきました。私は、初めあまり関心がありませんでしたが、「自分自身も若い頃に様々な企画があったし、結婚について教えられていたから助かった。教団を超えて協力すべき」との思いが与えられ、参加することにしました。そして、教会と独身者の現状を知るにつ

れ、クリスチャンとの結婚を願いながら40代になり、50代になっていく独身者の心の痛みや現状は深刻であることを思い知らされることになったのです。

「こんな状態になるまで、教会は放置していたのか？と思うと、心が痛む」という友人の言葉が胸に突き刺さり、教会に仕える者として心が震えるほどの危機感を感じたことを、今でも鮮明に思い出すことができます。「教会や教団を超えて新しいことを始めれば、きつと何かが起こるだろう」という期待を胸に、私たちはとにかく、手探りの状態で結婚支援を始めていくことになりました。

結婚支援は甘くない

近隣の教会から、伝道師、牧師夫人、重荷のある信徒など有志が集まり、知恵を出し合って企画を考えました。今までになかったことを始めれば、何となくそれなりにクリスチャンの結婚支援は進んでいくだろうと思っていました。が、現実はそう甘くはありませんでした。パーベキューや婚活パーティー、結婚の学びなどの企画を考え、何度かミーティングを重ねて運営をしてきましたが、約3年の活動で結婚したカップルは2組。そのうちの1組は、東京のクリスチャン結婚相談所を紹介

介しての成婚でした。その時、「やはりクリスチャンの結婚相談所は、決まるのが早い」と実感しました。

その後、各地での教会の結婚支援について、どのように行われているのか伺ったところ、同じように近隣の教会や教団内で協力して行われている結婚支援は、なかなか実りが少なく、どこも苦勞していることが分かりました。3年の活動で成婚カップル「ゼロ」という団体も少なくないようです。

地元での結婚支援には限界があり、「結婚を視野に入れた集會に参加表明しにくい」「長く続けていると、同じようなメンバーしか集まらない」「独身クリスチャンが仕事などで忙しく、社会的に活躍している独身者は、ほとんど企画に参加できない」など、おおむね全国的に同じような状況になり、「続かない」というのが現状のようです。さらにコロナ禍にあつては、独身クリスチャンの交わりや出会いの場が「皆無」となり、ますます事態が深刻化することとなりました。

